

授業科目の概要

(グローバルビジネス学部グローバルビジネス学科)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容
基礎 科目	スタディスキルズ	<p>大学における学修の目的と方法を理解する。講義の聴講、基礎文献の読了のみならず、自身の問題関心や学修の目的に沿った自主的な取組の必要を理解し、それに伴う学校施設やインターネットの正しい活用法を知り、パソコンのリテラシーを身につける。それによって必要な資料・情報収集力及び学修した内容をまとめ教員や他学生に報告したり、論文やレポートの作成法を身につける。</p> <p>本科目では大学での学修を行うための導入として、大学と専門職大学における相違点などの理解をした上で、本学における4年間の学習計画を学生自身が思索・実践する計画を策定することができるようになるための基礎を築く。</p>
	ICT演習	<p>本演習では、「IT基礎」の内容を踏まえ、実際に各人がアイデアを見出し、ICTを活用して、仲間たちと課題を解決していく模擬演習や、教材やツールを活用した体験型の演習を行う。特に、「臨地実習」時や就職後に、各人が主体的に課題や目的を達成するために、適宜、情報技術を活用し、必要に応じてチームを編成し、オンライン若しくはオフラインで協働していくための基礎力を身につけることを期待する。こうした経験が、将来、ICTツールを活用して、ビジネスシーンで活躍するための基礎となるだけでなく、更には、事業化やオープンイノベーションを生み出す原動力となることをも目指す。チームごとに成果を取りまとめるので、積極的な参加が必要である。各人やチームの状況に応じて、適宜、必要な指導をするので、主体的な学習も望む。</p>
	キャリア ディベロップメント I	<p>将来の進路や職業の選択を考えるにあたり必要な基礎的知識や能力を身につけるために、社会に出て働くとはどういうことか、自分の将来をどのようにイメージしていくかについて、人生100年時代を見据えて「キャリア発達理論」の提唱者ドナルド・E・スーパーが唱えた「ライフステージ（キャリアの段階）」と「ライフロール（キャリアの役割）」を軸として自分を知り、自立したキャリア観を育成する。</p> <p>キャリアの本質的な意味を理解するとともに、ビジネス社会が活躍している方のキャリア観に触れることで自分自身のロールモデルに触れると共にニューノーマル（新常態）における、ライフステージの在り方を思索する。</p>
	キャリア ディベロップメント II	<p>本科目では、人生100年時代に即したキャリア理論を紹介し、将来のキャリアデザインに向けたインターンシップの役割と重要性を理解する。また、業界、企業、職種研究として、本学必修科目である隣地実務実習参加に当たっては、目的意識を持って取り組めるようにする。社会人としての基礎知識、ロールモデルやメンター概念を習得していくことで、実習参加中にチーム力、コミュニケーション力、人的ネットワーク力の成長を促す。将来のキャリア選択に必要な基礎力の実践を最大化していく授業である。</p>

基礎科目	キャリア ディベロップメントⅢ	3年次から本格化する就職活動への理解を深め、学生から社会人へとギャップなくスムーズに移行する方法を検討していく。また、キャリアデザイン手法として世界で認知されている『ビジネスモデルYOU』やキャリアデザインシートを活用し、就職活動軸を見つけ、就職後も長期視点にて能動的にキャリアをデザインしていける力を身につける。就職活動準備の核となる履歴書・エントリーシート作成演習および、面接対策としてロールプレイ形式の学生相互評価を導入する。加速するオンライン上での選考形態も含め、体験型アクティブラーニング手法で面接対策を行っていく。
	グローバルキャリア ディベロップメント	グローバル化により社会の産業構造にも大きな変化が訪れ、国内でもジョブ型採用やDXが進んでいる。この状況下で、人生100年時代のキャリアデザインには、個人のEmployability（エンプロイアビリティ）を高める重要性が増していく。そのために政治・経済・文化といった世界の潮流を体系的に理解し、社会の変容を予測して対応できる力が求められる。本講義では、グローバル社会で求められる人材やスキルを理解し、国際的な視野を持ってキャリアを考えられる人材育成を目指す。又、現役でグローバルに活躍するゲストによる講話を通し、未来のキャリアイメージを具体化する。
	法学Ⅰ	社会の耳目を集めた事件やニュースに、法的観点から着目する。社会で仕事をする上で、また生活する上で起こり得る出来事や問題に、冷静に対応する基本的知識を修得する。また、日頃から事件や訴訟に巻き込まれないように気をつけておきたい心がけを具体的に挙げ、法のあり方についての理解を深める。更に民事裁判、刑事裁判、家事調停等の法的手続きを学ぶ。憲法の存在意義を学び、国の統治機構と基本的人権、憲法改正の手続き等を理解する。
	法学Ⅱ	法とは一体何か、何の為にあるのか、自分自身の権利や社会の秩序を守る為に法をどのように理解し、活用すべきかを考える。権利の上に眠る者は保護しないとの法の基本原則を始め、裁判員制度の仕組み及びメリット・デメリットを理解する。民法では「人」と「法人」の違い、物権と債権の違い、所有権とは何か、契約とは何か、不法行為と損害賠償、親族関係と相続を学ぶ。刑法の授業では、罪と罰とは何か、応報刑、目的刑、教育刑及び死刑、罪刑法定主義を考察する。
	次世代SDGsⅠ	本科目では2015年に国連で採択されたSDGs(Sustainable Development Goals)の17の目標と169の個別目標について学び、その目標の本質や企業がSDGsに取り組むべき意義について理解を深める。様々な企業におけるSDGsの取り組み事例を学びながら、ESG投資、ダイバーシティ&インクルージョン、ウェルビーイング、サステナビリティ、マーケティング3.0等、幅広い観点から企業が戦略的にSDGsに取り組むべき意義を考察する。座学での学習だけでなく、学んだ知識を実践の場で生かすために、企業に対しSDGsに関する取組を企画し提案も行うことで、仮説思考や企画遂行力、プレゼンテーションなど、イントレプレナーとして必要な能力も養うことができる。

基礎科目	次世代SDGs II	<p>本科目では2015年に国連で採択されたSDGs (Sustainable Development Goals) の17の目標と個別目標の存在を自分事として捉えるために、組織または地方における課題解決をテーマとし実践的にEDGsを学ぶ。</p> <p>組織における「ウェルビーイング」な働き方や「地域活性」や「地方創生」がなぜ必要とされているか意義を考察しながら、グループワークにて企業や地方自治体向けに商品企画などの企画を実践し、提案を行う場を設ける。</p> <p>他者と連携しながら企画を進める際にリーダーシップ・フォロワーシップを意識することで、チームマネジメント能力も養うことができる。</p>
	English and Current Issue	<p>社会問題への関心を高めつつ時事問題を活用しながらのスピーキングスキルを訓練するリベラル系科目である。スピーキング及び英作文スキルの強化を目的とし、教材として、米国のメジャーなニュースソースであるCBSニュースを元に時事的なトピックを活用する。受講生には、会話、スピーチ、英作文などの生産的活動に積極的に参加することが求められる。最終目標は、任意のトピックについて安定した英語力で意見を表現できるようになることである。</p>
	English and Popular Culture	<p>いわゆる「教科書では学ばない」ような、米国で実際に頻繁に使われている表現を学びつつ、エンターテインメントの世界で頻繁に取り上げられる問題、話題に触れていく。アメリカの、または元々はアメリカ以外の文化圏のものである有名な映画が生み、またはそれら映画に影響を与えている文化的影響を学習する。その手法として、アクティブリスニングやディスカッションを導入していく。</p>
	中国語・中国事情 I	<p>国際的な視野を養い、未来を創造するプロフェッショナルを育成するためには、経済大国である中国に関する知識が不可欠である。とりわけ、このグローバルな時代に英語に加えて、プラスアルファもう1つの外国語を考える際、世界の約5人に1人は話すと言われる中国語を選ぶのは自然な流れであろう。中国語および中国・台湾の歴史、文化や経済に興味を持つ履修者を対象とし、日中台の異同を解説する。1コマの講義を前後に分け、前半の講義は中国語の文法を中心に行い、会話を修得する。文法を重点的に行う理由としては、成人の外国語学習は幼児のような自然習得と違い、相応のルールや方程式を踏まえた上で学習することが、最も定着性がよく効率的な学習方法であるからだといえよう。後半の講義では、テキストのデータや配布資料に基づき、現代の中国事情を考察していく。</p>

基礎科目	中国語・中国事情Ⅱ	<p>グローバル化が進んだ現代社会において、他国を正しく理解することは極めて重要である。なかでも中国は、古来、日本を含む東アジアに多大な影響を及ぼしてきた。本講義は、3年次の「中国語・中国事情Ⅰ」に引き続き、中国語および現代の中国社会に関する知識を更に深めていく。幅広い教養、国際的視野を養い、豊かなグローバル感覚を身につけることができる。前半の語学講義は、必要に応じて文法や会話のほか、検定対策も取り入れる。また、近年中国は世界での存在感が増していることに鑑みて、後半の講義は、中国経済を中心に、中国の観光産業や世界戦略である「一带一路」などを解説する。本講義の教員は実務経験のある通訳案内士としての視点から、日中台の文化・歴史などの講義を実施する。</p>
	国際メディア	<p>世界の現状を知るには、多様なメディアから情報を得る必要がある。ビジネスの現場においても、正しいニュースを通じて、現状と展望を得なければならない。しかし、旧来の新聞やTVだけでなく、インターネットやソーシャルメディアを活用した情報伝達も盛んになっている現状において、多くの問題も浮き彫りになっている。本講義では、オンラインにおける昨今の問題を取り上げる。特に、コロナのようなパンデミックや大災害時におけるソーシャルメディアの利活用も進む一方、ソーシャルメディアによるフェイクニュースやシャープパワーは、既に国家統治に影響を与えるまでになっており、アラブの春のような国家崩壊を齎し、他国への選挙介入などの潜在的な影響力も指摘されている。また、個々人が発信する情報が地球全体に波及し、その結果、日常生活だけでなくビジネス自体をも変える力が無視できない。本講義では、こうした最新の事例を元に、情報を正しく理解すること、そして発信していくことの意義を学ぶ。</p>
	国際関係論	<p>第二次世界大戦以後、国・地域間の交流は急速に進んでいる。コンテナの登場による国際貿易・物流の急速な発展、インターネットの発明による国境を越えた通信の発達などで、既に一カ国単体だけで国家が成り立つということはほぼなくなった。どの国・地域も、他の国や地域との関係を保ちながら国家や企業を存続させる必要がある。また地球温暖化とそれに伴う自然災害の増大、食糧危機、そして未だ止まぬ国際・国内紛争は、世界が一丸となって解決せねばならない問題となった。これらのことから、今後どんな職業に就こうとも、世界で起こっていることに無関係ではいられない。そこで、本講義では、近年の国際関係から、現在世界で何が起こっているのか、何が課題か、それらの課題に向け、どんな解決策が試みられているかを学ぶ。</p>

職業専門科目	実習科目群	臨地実務実習 I	<p>臨地実務実習は、企業の実務を経験することにより、実務課題の捉え方、解決に向けたアプローチを習得することを狙いとして各年次の必修科目として実施する。1年次に実施の臨地実務実習 I から4年次に実施の臨地実務実習IVまで実務現場での実習経験を重ね、次第に課題の範囲、深さと解決に向けたアプローチの自律性を高めていき、最終4年次では、現場のニーズ、要件の分析により自ら課題を設定することに加え、解決に向けての仮説を自ら設定しこれを検証することにより、結論を導くというビジネスの現場における通常のプロセスを自ら体験する指導計画としている。</p> <p>このうち臨地実務実習 I は、業務プロセスを理解することを目標とする。ビジネスの現場における他者との相互理解、社会人、企業人としての基本的な能力、姿勢を身につけさせる。実習先企業の製品、サービス、業務内容、業務部署の役割、組織の構成を理解した上で、組織として業務を進めるために必要なコミュニケーションの重要性を理解させる。企業で業務を体験することで、これらを理解し実践できるようにする。</p>
		臨地実務実習 II	<p>臨地実務実習 II は、与えられた課題について計画を立てて業務を進めて完了させることを目標とする。与えられた課題に対し必要となる専門的知識、技術を統合し解を導く姿勢を身に付けさせる。実習先企業の製品、サービス、業務内容、業務部署の役割、組織の構成を理解した上で、組織として業務を進めるために必要なコミュニケーションの重要性を理解させる。企業で業務を体験することで、これらを理解し実践できるようにする。</p>
		臨地実務実習 III	<p>臨地実務実習 III は、業務の現状を分析し自ら課題を抽出し、解決に向けて計画を立てて業務を完了させることが目標である。現状分析により設定した課題に対し必要となる専門的知識、技術を統合し解を導く姿勢を身に付けさせる。実習先企業の製品、サービス、業務内容、業務部署の役割、組織の構成を理解した上で、設定した課題に対し解決に向けた行動をとる提案型の実務能力を身に付けさせる。</p>
		臨地実務実習 IV	<p>臨地実務実習 IV は、解あるいは解に向けたアプローチが単純には定まらない実務課題に対し、現状を分析し課題を設定し、解決に向けて複数の仮説を立ててこれを検証し解を導くというビジネス現場での通常のプロセスを体験し自ら実行することが目標である。現状分析による課題の設定、解決に向けた仮説の設定に対し必要となる専門的知識、技術を統合し解を導く姿勢を身に付けさせる。</p>
		English Fundamentals I	<p>1年次生の必須科目であり、語彙、文法、聴解、発話、作文、読解の基礎スキルを身につける科目である。聴解および読解スキルの向上に必要な理論を学び、学生や教科書から与えられる情報を正確に理解することを目指す。英語を英語のまま、余裕をもって間違いなく理解できるようにすることで、アウトプット力強化にも繋げることを視野に入れている。学期を通して発話、聴解、作文の段階的な訓練を重ねていく。</p>
	English Fundamentals II	<p>本授業はEnglish Fundamentals I からの継続クラスであり、6つのトピックをベースに、総合的に英語力を高めるものである。語彙、文法はもちろんのこと、読解、作文、スピーキング、発音、聴解等、広範に学習をする。これらの基礎を固めることにより、より専門的な科目において、各要素をより深く学習していくことができるものである。</p>	

職業専門科目
国際コミュニケーション科目群

<p>English for Global Business I</p>	<p>国際ビジネスでの失敗の70% は、異文化理解の不足だと言われている。すなわち交渉相手の会社、個人の世界観をまずは理解する必要がある。そのためには、宗教観・世界観を基礎的なところから学び、ビジネス上想定される状況、シチュエーションなど業種職種を問わず、そこで求められる英語活用スキルを学ぶ。具体的には ビジネスの現場で時と場面に応じた適切なフレーズが出てくるようになることである。実用的な国際英語に効果的にアプローチするためにはまず読むための構文と文法を習得し、聴解による練習を通して内容を把握し、それらをWriting and Speakingとしてアウトプット活動を行う。場面別にビジネス英語といってもあまり堅苦しくなく、ビジネスで関わるビジネスライクかつ丁寧な表現、少しでも丁寧な表現、メールでは書き言葉、対面や電話では話し言葉といった具合にさまざまな場面での適切な英語表現を分かりやすく学ぶ。授業の目的は単に英語表現や文法を学ぶことではなく、国際ビジネスにおける異文化理解を深め、英語という言語が果たす役割を理解することである。</p>
<p>English for Global Business II</p>	<p>このクラスでは、実践的な状況に応じたビジネス・コミュニケーション・スキルと、ビジネス環境のための英語のボキャブラリーと文法の基本的な理解を深めることに重点を置く。受講生は、ディスカッションに参加し、ライティング課題をこなし、その過程でプレゼンテーションスキルを身につけていく。トピックとしては、グローバルビジネス交渉、交渉環境、交渉プロセス、ツール、インターネット上での交渉、効果的な交渉のためのコミュニケーションスキルなどを取り上げる。これらの学習を通し、文化、習慣、価値観の多様性を学び、それらを英語運用スキルのベースとしていく。</p>
<p>English for Global Business III</p>	<p>Global Business における視野は従来以上に、異文化間コミュニケーション能力がカギになっている。英語における効果的なプレゼンテーションの技法を学びながら、どの分野において意思決定を行うにも、ERS（倫理、責任、サステナビリティ）の素養は不可欠である。この講座を通して、1. 異文化間コミュニケーションの言葉と概念、戦略を学び実践する。2. 倫理的かつ、社会の一員として責任ある行動のためのサステナビリティな行いとは何かを学ぶ。3. 効果的な異文化・ビジネスコミュニケーション技法を学ぶ。</p>
<p>English for Global Business IV</p>	<p>ビジネス上想定される状況、シチュエーションを、業種職種を問わずできるだけ広範に取り入れながら、そこで求められる英語活用スキルを身につけていく科目である。特に、Win Win の英語での交渉を成立させるためにはどうしたら良いか、Global leadership や Servant leadership の概念を学びながら、英語におけるNegotiation skills や効果的なビジネスプレゼンテーションを学ぶ。表層文化と深層文化を理解することが、国際コミュニケーションの秘訣であるので、それらの訓練もする。状況別の実践的なビジネス英語、ビジネス環境で必要となる基本語彙と文法も併用して学ぶ。</p>
<p>Discussion for Global Business</p>	<p>本授業の目標は、意見を伝達し、集団でのディスカッションを首尾よく進めていくためのスキルを実践を通して習得していくことである。小まめな小テストを行い、それを通して使いこなせる基本表現量を強化していく。一般的で日常的なトピックと合わせ、ビジネスに関する時事的な社会問題も扱っていく。聴解スキルおよび発話スキルの向上に主眼を置いていく。</p>

職業専門科目

国際コミュニケーション科目群

<p>Presentation for Global Business</p>	<p>本授業は、プレゼンテーションスキルの向上とそのためへの訓練を行う授業である。様々なワークショップ、個人作業、グループ作業を行うことで、英語プレゼンテーションのクオリティをアップさせていく。同時に、様々な英語ネイティブのプレゼンテーション資料を観察、分析し、そのディスカッション力も取り入れる。学生は経験豊かな話し手を参考にしながら訓練を重ね、講師からの指導を受けながらプレゼンテーションのためのオリジナル原稿を作成する。パブリックスピーキングにおける非言語コミュニケーションの、プレゼンテーションへの効果についても学ぶ。</p>
<p>応用英語 コミュニケーション I</p>	<p>オフィス、食事、その他日常的な状況で用いるに適した文法や語彙を、読解、英作文、スピーキング、発音、聴解訓練を用いながら学び、ビジネスの現場でTPOに応じた適切なフレーズが出てくるようになることを目標とする。実用的な国際英語に効果的にアプローチするためにまず読むための構文と文法を習得し、聴解による練習を通して、内容を把握し、それらをWriting and Speaking としてアウトプット活動を行う。ビジネスで許容される範囲の比較のカジュアルな英語、ビジネスで関わるビジネスライクかつ丁寧な表現、メールでは書き言葉、対面や電話では話し言葉といった具合にさまざまな場面での適切な英語表現を分かりやすく学ぶ。</p>
<p>応用英語 コミュニケーション II</p>	<p>本授業は、「応用英語コミュニケーション I」から繋がる位置づけであり、ビジネスシーンでの実際的なコミュニケーションにおける基礎英語力を向上させることを主眼に置いている。授業は講義、実践、テストで構成する。学生には授業教材とは別に自主学習のための資料を配布する。学生は筆記課題に積極的に取り組むと共に、適切な声量で英語を話し、学生や講師とのディスカッションに主体的に参加すること。最終授業では、ビジネスシーンで要求される総合的なコミュニケーションスキルを活用するスキルアップの仕上げとしてクラス内面接と筆記課題を行う。</p>
<p>米英ビジネス ジャーナル読解</p>	<p>欧米のビジネスジャーナル、米国の Time、Harvard Business Review、英国のThe Economist、London Business School Reviewなどのジャーナルを日英の言語で読みながら、世界のビジネス状況を把握していく。特にコロナ禍中の世界のビジネス動向、AIと経済等、社会に大きなインパクトを与える議事を選択し、欧米のビジネスの状況がどうなっているかを理解する。また、欧米のジャーナルを読解することにより、コロナにより世界の経済・日本の経済がどのような影響を受けているのかなど、最新の世界のビジネス状況を考察する。YouTube や 英語のインターネットサイトを利用して英語のプレゼンテーションスキルも学ぶ。</p>
<p>English Writing Skills I</p>	<p>本授業ではエッセイ形式で自身の意見を書く作業を通して、論理的で、説得力のある学術的、専門的な英作文スキルの基礎を習得する。最新の英文校正ソフト (Grammarly, QuillBot, Deep L) を利用し、自分で書いた英文をさらに質の高い文に仕上げる。</p>

国際コ

職業専門科目	コミュニケーション科目群	English Writing Skills II	<p>レポートや概要文作成に必要な適切な表現の選択や引用方法、ビジネス環境における情報伝達方法を学習する。</p> <p>テーマについて、自分自身の意見をエッセイ形式で書くという演習を行い、アカデミックで専門的な文章を英語で書くスキルの基礎を習得することを目的とした授業である。英語表現の選択、論理性の構築、文構造の理解、編集や校正のスキル学習に取り組んでいく。また同時に、ネット社会化したことで社会問題になっている剽窃についても理解するとともに、全てデジタル端末を使って行うことで、現代社会で求められる最低限のITスキルも同時に身につけていく。必要に応じて、英文法の基礎や、日本語と英語の違いなどにも触れていく。</p>
		貿易実践英語	<p>この講座では専門基幹科目群の必修科目の貿易概論で学んだ貿易に使用する基本的な用語の復習と更なる理解を英語を使用し深めることを目的とする。近年サプライチェーンのグローバル化が顕著となり海外のパートナーとのやりとりは必須となってきた。事実、食品・農産品の多くは輸入され、工業品は輸出されている。とくに自動車やIT機器の完成品や部品などは世界中のサプライヤーの間を行き来してサプライチェーンの最適化が行われている。貿易に関わるそれぞれのトランザクション（問い合わせ、商談、条件ネゴ、貨物受領、クレーム、返品、支払いなど）をベースにそれに関わる文書（メール）や商談に使用する英語表現やコレポンのマナーやルールを学び、海外のビジネスパートナーとのスムーズで正確なビジネスコミュニケーション能力を身につける。また海外諸国の文化にも触れ将来使用するビジネスコミュニケーションに役立つヒントも紹介する。</p>
職業専門科目	専門基礎科目群	マーケティング概論	<p>実務面からマーケティングの考え方を理解し、これを活用したICT分野のビジネス戦略、戦略を具体化するためのアクションプランを含む戦略シナリオの立案、展開ができるようになるための基盤となる知識、理論を学ぶ。具体的には、事業企画などで使われるマーケティングの各種分析手法を幅広く学びその活用法について具体事例を通して考えさせる。各種分析手法は、市場分析、市場ターゲットティング、市場参入戦略立案、評価にわたる。また、Webマーケティング、AI技術活用マーケティング手法を学び、実務で活用するための知識、技能を身につけさせる。さらには、ICT分野での具体的な事例として、新規製品、サービス事業の立ち上げ及び既存事業の再構築の成功、失敗事例を示し、何故成功したか、失敗したかを考えさせ、当該事例での市場ターゲットティング、市場参入、立て直し戦略を検証、マーケティング観点での企図を確認することにより、戦略シナリオ立案、展開の具体化について学ぶ。</p>
		流通論	<p>現代のわれわれの生活にとって流通や商業は不可欠な存在である。流通や商業は生産と消費を結びつける活動であるが、メーカーや消費者の変化により変化してゆく。そこでこの講義では、まず、流通・商業についての基本的な説明からはじめ、小売業、卸売業それぞれの変化や流通のグローバル化についても論じてゆく。特に1990年ごろから情報通信技術の発展により、eコマースが発展してきている。この講義では特にeリテイル（BtoC）を中心に、伝統的な流通との対比において、その特徴および今後の発展について事例の紹介も行いながら、進めてゆく。また流通のグローバル化については国産商品調達、海外出店、外資の進出など、また情報化を背景とした消費者の国際化について、情報入手や海外製品の流入などの点からも論じてゆく。</p>

職業専門科目	専門基礎科目群	グローバル マーケティング実習	<p>マーケティングとは企業が顧客との関係を創造、維持をさまざまな企業活動を通じて実現してゆくことである、ということができる。そしてグローバル化とは、企業活動や社会現象が地球化してゆくことを意味している。つまり、産業や社会の国際化や多国籍化が高度に進展している状態である、ということもできる。グローバルマーケティングの理論や概念は国境を越えた企業活動や社会現象の展開が進む中で、企業がどのようにマーケティングを実践したり、直面する課題を理解し、それに対応するために役立つ。またグローバル化は、世界の産業と社会のトレンドであると同時に、われわれの日常生活とも結びついているという二面性がある。グローバル化の進展は、ひとつには先進国の国内市場の成熟化があり、また企業間の協調や連携の必要性の高まりやインターネットによる情報の流通、電子商取引(eコマース)の増加が挙げられる。そこで、この講義ではさまざまな企業のグローバルマーケティングの事例を紹介しながら、グローバルマーケティングについて考えてゆくことにする。</p>
		経営とDX	<p>本講義では経営視点からデジタルトランスフォーメーションについて学ぶ。企業は外部環境の急激な変化に追従し、存続もしくは成長することが求められる。デジタルトランスフォーメーションが目的とするところは、IT活用の推進活動にとどまらない。時として、企業風土やこれまで確立してきたビジネスモデルを一から見直し、新たな企業風土の醸成、新たな価値を創造するビジネスモデルを確立し、経営戦略の見直しまでに及ぶ。企業においてデジタルトランスフォーメーションを推進するにあたり、いくつかの切り口を通して、何を目標とかけ、その目標に向けてなすべきことは何かということについて考えていく。デジタルトランスフォーメーションを切り口に経営における視点・視座の持ち方について考えることで、経営についての学びも深めるものとする。</p>
		経営学	<p>産業革命以降企業の生産性を上げるために実務家による経営論が数多く展開されてきた。技能から技術へ、米国の自動車産業で開発されたフレデリック・テイラーの科学的管理法など専門性と役割分担による大量生産大量販売に最適化された。しかし多品種少量、サービス化に産業がシフトする時代には、経営学、マネジメントは人間学を基礎にした理論にシフトしてきた。マネジメントを体系化したP・F ドラッカーによるとマネジメントは「社会的資源を顧客満足に変換することで人類の安全、安心、幸福を実現することで顧客を創造する」としている。顧客に思いを馳せる「精神」の分野と、現実を見て正しい問題定義による目標を設定する「戦略」と、時間を有効に活用する「実践」の3分野ごとに成功事例から経営の原理を学ぶ。</p>
		イノベーション マネジメント	<p>企業の成長や起業するためにイノベーションをどのようにマネジメントしたらいいかについて事例や事例に共通する原理や手法を紹介する。米国主要MBAで使われているMOTのバイブル、クレイトン・クリステンセン著「技術とイノベーションの戦略的マネジメント」やドラッカーの「イノベーションと企業家精神」などを紐解きながら内外の事例と担当教員の経験を紹介する。</p>

		<p>プロジェクト リーダー養成実習</p>	<p>会社においては様々なプロジェクトが複数進行する。経営陣からはプロジェクトリーダーに円滑な運営、納期厳守、品質の良い成果物のアウトプットなどのリードが期待される。プロジェクトではない業務においてもプロジェクトリーダーが身につけているべきスキルを発揮することで円滑に進めることができる。本実習の前半はプロジェクトリーダーが備えるべきコミュニケーション力、ファシリテーション力についてグループワークを中心に疑似体験することで実践において活用できることを目指す。プロジェクトをリードするために必要な具体的なツール（道具）についても、与えられた課題に対しグループで取り組むものとする。後半では応用展開として新サービスの提案書の作成を仮想のプロジェクトチームで取り組み、『プロジェクトチームで仕事を進めること』を疑似体験し、プロジェクトリーダーの役割について理解を深めるものとする。</p>
		<p>経営組織論</p>	<p>経営組織は経営の道具として位置づけられる。経営目的があり、経営目的を達成するために、戦略があり、戦略を実現するために道具または手段としての組織がある。従って企業組織、行政組織、病院や介護施設など組織の種別により、新事業の起業、事業の安定的継続、期限のあるプロジェクトなどの目標により組織は異なる。とは言え、人と人との協力や組織間の協業においては人間学に基づいて共通する組織設計の原理があるため、経営組織論の歴史的内外の知見と事例を抽出しながら経営組織デザインの考え方を紹介する。</p>
		<p>経済学Ⅰ</p>	<p>我々が日常的に行っている財・サービスの売り買いは最も基本的な身近な経済活動である。この経済活動を個別具体的に捉えるのではなく、少し抽象化し、もっと一般的に考えてみようというのがミクロ経済学の基本的なスタンスである。まず、売り買いする場を市場と呼び、買い手を需要者、売り手を供給者と呼ぶ。この市場における経済活動を需要曲線と供給曲線とその背後にある効用最大化や利潤最大化などの利己的な行動原理に基づく消費者行動や生産者行動分析を考察する。経済活動の場としての市場は、完全競争市場、独占市場、寡占市場、独占的競争市場などの市場形態を考える。現実の諸々の経済現象の分析や経済安定化の為にこなされる経済政策効果を分析できるようにすることが大きな目標である。</p>
<p>職業専門科目</p>	<p>専門基礎科目群</p>	<p>経済学Ⅱ</p>	<p>マクロ経済学は経済活動を俯瞰的に見る。例えば日本全体の経済活動が活発であったか（景気が良かったか）、低調であったか（景気が悪かったか）を考える。その為には日本国内に存在する企業はどれ位の財・サービスを生産したか、どれくらいの人が働いたかあるいは失業したか、海外との取引の結果、輸出分が多かったのか、輸入分のほうが多かったのか、物価は安定していたのかなどを考える必要がある。その理解を深める為に、標準的なマクロ経済学を学び、まず第一に家計、企業、政府の行動がいかにして、財市場において国民総生産を決め、貨幣市場で金利を決定するかのメカニズムを理解する。次いで、政府の金融財政政策が経済の安定化のためになぜ必要なかを理解する。ついで時間とともに経済がどのように変動し、その結果経済がどれくらい豊かになったのかを長期的な観点から考察する。</p>

		<p>国際経済学総論</p>	<p>国際経済学は国と国との取引を財・サービスの取引と国際金融取引の二面から考える。自国で生産できないものを他国から輸入し、他国で生産できないものを輸出すれば、お互いの国の生産性は上昇することは直感的に明らかだが、自国と他国が同じものを作っていたら取引（国際貿易）は必要ないのだろうか。まずは、国際経済学の基本として「比較優位の法則」を学び、たとえ両国が同じものを生産していても、取引による利益は存在するということを理解する。そのうえで、世界の各国、各地域の経済は国境を越える資本や人の移動、財、サービスの輸出入を通じての相互依存関係がある事を学ぶ。この国際的な経済取引により各国がどのような利益・損失を得ているのかを、その結果どのように成長してきたのかを理解する。</p>
<p>職業専門科目</p>	<p>専門基礎科目群</p>	<p>ビジネスファイナンス</p>	<p>ビジネスパーソンにとって、会計の観点から自らが経営する会社、属する会社の経営状況を知ることが必須といえる。売上規模、利益の有無、どのような資産と負債があるかなどが把握すべきこととしてあげられる。また、自らの会社にとどまらず商品やサービスの仕入れ先となる会社、販売先となる会社、ライバル会社の経営状況の把握も、経営の意思決定においては重要な要素の一つである。企業の活動の内容は何らかのかたちで表さなければならない。その表されたものの一つの形態が財務諸表である。財務諸表を分析することで、様々な角度から会社の特徴を知ることが可能となる。また、財務諸表を比較することでライバル会社との強み、弱みの違いの比較を定量的におこなうこともできる。さらに、特定の業界の複数の会社の財務諸表を分析することで、その業界の特徴をつかむことも可能となってくる。さらに、ファイナンスにおける各種道具を使いこなすことによって、定量的なデータをもとにした意思決定が可能となる。商品やサービスを仕入れて販売する際や、製品を開発して販売するとき定性的なことがらのみでは、経営の意思決定をおこなう際にこころもとない。その際に定量的な予測や裏付けとなるデータをもたらしてくれるのが、ファイナンスにおける各種の道具といえる。本授業では、実際のビジネスで用いられる（実務の）観点から会計とファイナンスについて学んでいくことを目的とする。</p>
		<p>国際金融論</p>	<p>この授業では世界規模で影響を及ぼした金融事例を事前に提示し参加者の国際金融への問題意識を醸成後、事例（シナリオ）分析に必要となる実務、理論、政策を提供。これらをグループでの議論に活用することで、問題の本質を掴む能力を育成していく。また講義はパワーポイントを用いるとともに、できる限り多くの資料を用いることによって理解しやすいように努める。</p>

<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">専門基幹科目群</p>	<p style="text-align: center;">グローバルサプライチェーンマネジメント総論</p>	<p>グローバルサプライチェーンマネジメントとはサプライチェーン・マネジメントをグローバルな視点から実施しようとする考え方であり、原材料の調達から製造、物流、販売までの全行程を国内のみならず、海外の拠点も含めて最適化する仕組みのことである。このような考え方が注目されているのは、企業間競争がグローバル化しており、また、情報技術の発展により、情報の共有が容易となり、情報にもとづく環境の変化に柔軟に対応することが求められているからでもある。またグローバルサプライチェーンマネジメントには、政治的、経済的、文化的諸要因も大きな影響を与える。これらの制約要因についても言及しながら、この講義では、ロジスティックス、サプライチェーンマネジメントやBPR（業務改善）にもふれながら、グローバルサプライチェーンマネジメントの全体像を明らかにしてゆく。</p>
	<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">職業専門科目</p>	<p style="text-align: center;">グローバルサプライチェーンマネジメントⅠ</p>
<p style="text-align: center;">グローバルサプライチェーンマネジメントⅡ</p>		<p>サプライチェーンマネジメントは組織や国の境界を超える供給連鎖全体最適にすることであるが、ミクロな生産工場内での工程連鎖の効率化、在庫削減手法がグローバルなロジスティックスにも応用できる。コンテナ輸送は陸送と海上輸送の統合であるが、その原理は工場内での工程間のカンバン方式による統合と同じである。従ってその手法や思想はトヨタ生産方式やドラッカーのマネジメントが有効である。どちらもモノとカネの流れという現場現実の時間軸でのアクションであるロジスティックスを重視する。サプライチェーンの原理からICTのDX設計への知見を紹介する。</p>
<p style="text-align: center;">グローバルサプライチェーンマネジメント実習</p>		<p>本講座では、グローバルサプライチェーンマネジメント論 I&II で学んだ基礎的・理論的な内容をベースに、さまざまな領域における企業の事例を取り上げ、各業界に特有なもののみならず、それらに共通する要素を明らかにしていく。ハーゲンダッツの高品位物流の構築に関わる研究とベンダー・パートナーとの連携強化の考察、ナイキにおける在庫削減のためサプライチェーンの体系を変更し、業界に先駆けナイキフューチャーズを導入し産業のスタンダードを覆した事例研究、デルテクノロジーがコンピュータ業界で起こしたBTO革命とそれによって起こったITバブルの研究など、これらの企業でキーマンとして要職に就いていた講師本人からこれら生の事例を解説し、その事例を具体例として、ケーススタディーの課題として生徒がグループワークを通じ、自ら考える思考を学ぶ。トップダウンではなくボトムアップの授業に導く。最終考査ではグループで選んだ上記企業以外の事例についてサプライチェーンの研究を行い強みとリスクをそれぞれ発表する。</p>

貿易概論	<p>貿易は、我々の日々の暮らしに、そして我が国の発展や世界の繁栄に欠かせないものとなっている。資源を持たない我が国は貿易によって発展したと言っても過言ではない。それは明治維新を迎え、欧米諸国と肩を並べるべく国づくりを行った時、そして国が焦土と化した第二次世界大戦後の復興の時がそうであった。2021年には東京オリンピック・パラリンピック2020が開催され、2025年には大阪万博の開催が予定されており、我が国の貿易はますます盛んになるであろう。</p> <p>本講義では、貿易とは何かについて、貿易取引の実務の流れについて体系的に学び、特に国際貿易体制と経済連携協定、市場調査と取引先の決定、取引条件と契約、インコタームズ、外国為替相場と代金決済、貨物の輸送と船積み書類について学ぶ。</p>
貿易実務論	<p>「新しい」といっていたものがすぐに「古く」なる時代となった。この20年の間にもIT技術の目覚ましい発展が貿易取引に大きな影響を与えた。その代表的なものが「越境EC」と呼ばれるオンライン商取引である。このほか輸送手段の高速化、ドローンによる貨物輸送の実証実験など輸送のあり方にも変化がみられる。取引自体も単なる二者間の取引から三者間、四者間と多角化している。遠方から貨物の出し入れをハンドリングする非居住者在庫・通関などの新しい取引形態も発達した。</p> <p>本講義では、まず「新しい貿易取引形態」と題して、近年見られる新たな貿易取引形態について学ぶ。このほか、貿易に関わる保険、貿易管理制度、品目分類とHSコード、通関手続き、関税と関税評価、貿易と災害・感染症の拡大、貿易と環境について学ぶ。</p>
貨物輸送論	<p>物の流れは古代から重要なものであり、現代社会においても不可欠な存在である。国際商取引の物流分野では契約の対象となる貨物を目的地まで輸送手配する場合、海上輸送、航空輸送、及び陸上輸送手段などが用いられる。貨物輸送論では、これらの貨物輸送手段に関する理論、及び多国間取引の増加に伴うFTA/EPA及びRCEPなどの国際ルール（経済連携協定）、WTO/TPPなどの国際貿易の枠組みを学ぶことにより、グローバルな視点を身に付けることを目的とする。</p>
貨物輸送実習	<p>国際物流（輸出入、及び三国間）の流れを理解すると共に、国際輸送条約の理解を深めることによって、運送人、荷送人、及び荷受人の責任範囲を把握することが可能になる。実際に、輸出入通関に必要な書類の作成を経験することを通じて、輸出者の視点、輸入者の視点、及び運送人の視点から国際取引社会が長い期間を通して築いてきた複雑かつ合理的な貿易システムを実感してほしい。また、国際物流の最前線を見学することで現場感覚を感じることができる。</p>

		<p>通関概論</p>	<p>「通関」(Customs Clearance)とは、関税法その他関税に関する法令に基づき貨物の輸出入の許可を受け税関を通過することをいう。「通関手続き」(Customs facilities)とは、関連法令に従って関税の確定及び納付に関する手続きを含む申告又は承認の申請からそれぞれの許可又は承認を得るまでの手続きをいう。通関には①関税その他の輸出入税の納付、②貿易統計の作成のほか③輸出入貨物の取り締まりという意義を持つ。本講義ではまずこの「通関」や「通関手続き」の意義や機能について学び、「通関士」制度についても学ぶ。我が国の「通関士」制度は、1966年の関税の申告納税方式導入により、翌年通関業法が制定された際、通関業者とともに誕生した。通関士は通関業務の専門家として、輸出入申告書、船(機)用品積込申請書、蔵入承認申請書、不服申立書、修正申告書、更正請求書などの通関書類を審査を行う。</p>
<p>職業専門科目</p>	<p>専門基幹科目群</p>	<p>通関論</p>	<p>通関関連法令を体系的に理解するため、関税法及び関税定率法及び関税暫定措置法のいわゆる関税三法令及び我が国の輸出貿易制度を規定した外国為替及び外国貿易法(主に第6章)を学ぶ。まず関税法(総則、船舶及び航空機、輸出通関、輸入通関、保税地域、運送、収容及び留置、課税物件確定時期と適用法令、納税義務者、関税額の確定、関税等の納付及び納期限、不服申立て・その他雑則)について学び、次に、関税定率法(総則・税率、課税価格の決定の原則、課税価格決定方法の例外、特殊関税、減免税・戻し税)について学ぶ。 続いて、関税暫定措置法、その他の法令・条約(電子情報処理組織、コンテナ条約、ATA条約等)について学ぶ。次に、通関書類の作成及び通関実務(輸出申告書の作成、輸入申告書の作成、関税額等と課税価格の計算方法及び関税率表の解釈に関する通則、関税率表の所属の決定)について学ぶ。最後に、我が国の輸出入貿易管理制度を規定した外国為替及び外国貿易法(第6章)及びその政令である輸出貿易管理令及び輸入貿易管理令について学ぶ。</p>
		<p>eコマース実践</p>	<p>eコマース(EC)の概要を理解した上で、eコマース(EC)サイトの立ち上げや運用をするために必要な知識を身に付けることを目指す。 eコマース(EC)の歴史を把握した上で、実務的な業務内容を理解する。また、最新のeコマース(EC)の動向・トレンドについても必要に応じて解説する。</p>
		<p>最新物流戦略</p>	<p>戦略物流(ロジスティクス)をベースに、成長ビジネスモデルを構築させている事例を学び、理解・研究し、「イノベーターシップ」の養成を目指す。その方法論として、身近にある流通やネット通販など小売の最新物流事例を通して、最新ビジネス環境を知り、理解していく。さらに「物流思考」の視点から、「問題解決」ができるようになる。授業は、講義、グループディスカッション、プレゼンテーション、事前課題を通して進めていく。</p>
		<p>アジアビジネス</p>	<p>中国経済の概要、中国市場の分析、そして主要な中国企業の戦略・成長過程の研究を通して中国経済の成長要因を理解する。その上で、成長を続ける中国市場にどのように進出し、また強化化する中国企業にどのように向き合うのかをE-コマース分野の事例を通して議論する。 カリキュラム後半では、習得した基礎的な知識を用いて、戦略仮説を立案させることで、実践的な中国事業戦略策定のプロセスも習得できるようにする。</p>

職業専門科目	専門基幹科目群	グローバル ロジスティクス I	<p>本講座では1年次に履修した専門基幹科目群の「グローバルサプライチェーンマネジメント概論」および「貨物輸送論」、で学んだ知識をベースにロジスティクスの基本概念とフィジカルディストリビューションとの違いを明確に理解する。さらにはサプライチェーンとの関連性に触れ、各関連ファンクションとのインターアクションによって生まれる最適化についても学ぶ。よくロジスティクスと物流は混乱して使われるが、それぞれの体系とスコープを理解することにより明確な違いを理解する。ロジスティクスの以下のファンクションが授業のトピックとなる。1. ロジスティクスとは、その歴史と変遷 2. 配送、物流との違い、 3. 国際配送・輸送、 4. 国内外倉庫配置と管理、 5. 荷役（マテリアルハンドリング：マテハン）、 6. 梱包・包装および資材、 7. 国際的な流通加工（Value Added Service）、 8. 多国間リバースロジスティクス（動脈物流と静脈物流） 9. 情報システムとインターフェース、 10. 在庫最適化とコスト削減、 11. Business Contingency Recovery Plan (BCRP) の考え方、 12. ロジスティクスにおけるSDGsとは</p>
		グローバル ロジスティクス II	<p>本講座ではグローバルロジスティクス Iで学んだロジスティクスの基礎知識をさらにディープダイブし、より具体的な輸送モードや倉庫タイプ・配置・管理、さらにはそれに付随する手続きや方法論について学ぶ。国際運送は時代とともに輸送機器の発達とともにそれを利用するサービスがより複雑になってきた。それはサービスの最適化によって荷主だけでなく最終ユーザーにサービスや価格のベネフィットをもたらすものとなった。まずはフィジカルディストリビューションの基本モードである陸運：トラック・鉄道、海上：船舶（バルク トランパー・コンテナ バースタム）、航空：航空機機材などについても深くを学び、運輸業はもちろんのこと商社・メーカー等で使える実践力を磨く。さらにはそれに付随する機材や運用方法の特徴を理解する。また国際輸送に必要な基本的な仕組み（流れ・運賃体系）を理解し、倉庫の配置についての考え方やその管理を学び、乙仲実務に直結する用語や知識を学ぶ。</p>
		国際通商協定	<p>世界は第二次世界大戦後、世界平和の達成のために、自由貿易を目指し、関税及び一般協定（GATT）体制を確立・推進してきた。その後、GATTウルグアイ・ラウンドの成功の後、1995年1月、GATTの発展的解消とともに世界貿易機関（WTO）が設立された。その後、WTOの加盟国増加とともに、交渉が行き詰まると、これに代わって経済連携協定（EPA）や自由貿易協定（FTA）が盛んに締結されるようになった。2021年10月現在、我が国では18の経済連携協定（EPA）と日米貿易協定を合わせた19の協定が発効されている。2020年11月にはASEAN10カ国、日本、中国、韓国、オーストラリア及びニュージーランドの15カ国で地域的な包括的経済連携（RCEP）協定の署名がなされ、近々発効するとされる。今後、貿易取引を行うにあたっては、このEPA/FTAの理解が欠かせない。本講義では、EPA/FTAを概観し、次のこれらの協定を活用し、関税の優遇を受けるための手続き方法について学ぶ。</p>

職業専門科目	専門基幹科目群	IT概論	<p>パソコンの登場以来、世界は大きな変化を遂げた。従来、考えられなかった簡便さで世界がつながり、新ビジネスの誕生に伴い新しい富も作り出されるようになった。このビジネスモデルの変化は世界規模で起こっているが、その技術をもたらしたのがパソコン及びインターネットである。</p> <p>本講義は、本学部のDX科目及びデジタル科目カリキュラムの導入であり、メディア戦略に関わるカリキュラムの基礎となる。日常でのパソコン使用レベルから、新ビジネスモデルビジネスに携わる職業人に求められるハードウェア、ソフトウェア、インターネットの機能・概念・操作方法の基本を網羅して学修し、デジタルリテラシーの基礎を身につけ、現在進行中のデジタル革命に踏み出す知識を身につける。</p>
		データ解析	<p>ビジネスにおいてデータ解析は、定量的に課題を明確化するとともに、その課題を解決するための提案を補完するための予測値、もしくは予測をするための数式を導き出すための手段として活用される。本講義ではデータ解析をおこない課題を解決する提案ができる力を養うことを目的とする。前半はデータ解析の基礎となる統計について講義する。解析の道具としての統計をどのように駆使するか、自ら考えられるようにすることを到達レベルの目標とする。後半は実践のビジネスにおいてデータ解析がどのような場面で使われているか、具体例を中心に講義する。テーマとして倉庫管理、小売り、ECなどを扱う。実践において定性と定量をもって、課題に取り組むことができる力を養うのが到達レベルの目標となる。</p>
		DX論 I	<p>はじめにデジタルトランスフォーメーション（以下、DX）を学習する意義を確認し、自らが目指すべき人材像を明確にする。その後、歴史的にどのように技術が変遷し、新たな技術が生み出されることによって社会がどのように変わっていったかについて学んでいく。後半では、企業内、企業間で扱われているシステムについて、具体例をもとに学びを深める。また、システムがどのように実現、実装されるかについて学ぶ。システム開発の出発点となる要求仕様書を実際に作成することで、システムの全体像を把握し、システムが解決すべき課題は何かを明確化する力を養う。学生は毎回の課題を事前準備し授業に臨み、授業において見解を述べるなど双方向での演習形式で授業を進める。</p>
		DX論 II	<p>デジタルトランスフォーメーションを外部環境（市場や顧客）の変化に対応しつつ、内部環境（組織や文化）の変革を牽引しながら、IT技術やそれによる新たなプラットフォームを利用して、生産性の向上を含む新たな価値を創出することと位置付けている。DX論 I で学んだ内容を踏まえ、デジタルトランスフォーメーションについて、IT技術に求められる要件、課題と取り組みの観点で学ぶ。具体的には、社会システム、企業システムのプラットフォームとなっているクラウドサービスに焦点をあて、サービス面、仕組み面から理解を進める。サービス面では、クラウドサービスの構築、運用、品質について現状の課題を考える。仕組み面では、クラウドサービスを実現しているネットワークサービス（固定網、モバイル網）、仮想化技術について学ぶ。また、クラウドサービスの進展により適用が広がるIoT技術を活用したサービスについてそのビジネスモデルを考察する。情報技術によるサービス、仕組みの理解、ビジネスモデルの考察を通し今後の方向性を考えつつ、新たな改善に繋がる自らの発想力を育み、将来に対する使命感を滋養する。</p>

職業専門科目	専門基幹科目群	DX論Ⅲ	<p>DXを進めていく上では様々なデジタル技術を利用して、これまでにない新たなビジネスモデルを構築し、利用者に対して効果的なITサービスを提供する必要がある。</p> <p>またDXでは、これまで以上にデジタルへの依存度が高くなるビジネスの継続性（事業継続性）を維持するために、安定的なIT運用を実現する管理手法が求められる。</p> <p>本講義では、プロセス改善や効果的なIT運用管理を実現するための手法であるITサービスマネジメント（ITSM）を中心に学び、更にITシステムの安全性を実現する際に重要となる情報セキュリティマネージメントを学び、それを通してリスクマネージメントについても学ぶ。</p> <p>ITSM、情報セキュリティマネージメント、リスクマネージメントについては理論だけではなく、ケーススタディ形式の演習を通して既存の課題を発見し、解決法を考え、相手に対し改善案を分かりやすく説明できるスキルを身に着ける。</p>
展開科目	デザイン設計	<p>ウェブビジネスのマネタイズを考える際に、ユーザの目に触れ使用するすべての情報を指すUI（ユーザインターフェイス）デザイン、ユーザがサービスを利用して獲得できる体験であるUX（ユーザエクスペリエンス）デザインを踏まえてデザイン設計を考えることは重要である。</p> <p>誰もが目にするウェブサイトの一つを思い浮かべてみて、そのサイトがなぜユーザの好感を得るのかを検証する。ウェブビジネス上でデザインと言われる範囲は広く、素材となる画像やイラストなど可視化できるコンテンツやイメージを左右する色合いなどを踏まえて決定する重要性も学ぶ。本講座ではウェブビジネスを支えるデザインソフトの使用だけでなく、商業デザインに対するディレクションや、工数を判断する能力を身につける。</p>	
	メディアデータベース	<p>本講義では、データベースの基礎を学ぶことで、ビッグデータ時代のビジネスにおけるデータ管理と活用へつなげる。データベースは、ビッグデータ時代の基盤であり、統計分析やビジネス上の意思決定の基礎となり、欠かせない。講義では、データベースの理論、データ構造、情報検索などの学術的基礎を学んだ上で、データベースソフトを使い、実際に幾つかのビジネス場面での使用を想定し、データベースを設計構築、必要なデータの登録、検索、分析などを一通り習得する。</p>	
	メディア戦略Ⅰ	<p>企業が社会へ情報発信をするメディアツールは複数あるが、情報発信ツールの要となる一つが「ウェブサイト」である。本講座では、前半、メモ帳などを使ったコーディングの基礎から学び、Webページの構造を理解する。ウェブサイト制作の基礎知識・技能である「HTML言語」と「CSS」でソースコードを入力しウェブサイトの構造化（Markup）を理解するとともに、Writingスキルの正確さの向上も図る。</p> <p>後半では、ウェブサイトをツールとして活用し「無料サービスから収益化する」マネタイズの在り方を学ぶ。ウェブサイトがどうビジネスとなるのかという「ビジネス的視点」を持ち、事業を軌道に乗せ利益を生み出すための情報発信スキルを考える。</p>	

展 開 科 目	メディア戦略Ⅱ	<p>『メディア戦略Ⅰ』で習得した知識やスキルをベースに、企業現場で実務上ウェブメディアを通じて企業がどう収益化を考え実践しているかをウェブサイトを作る課程を通じて学ぶ。前半では、情報発信をする際に企業現場のWebサイト制作のデファクトスタンダードとして使用されるオーサリングツールAdobe「Dreamweaver」の操作方法の習得しながら、情報発信時に企業が使用するMetaタグなど検索サイト内で優位性を得るための実践方法である検索エンジン最適化(SEO)を理解する。中盤以降では企業のWebページ日常更新業務を行う際に使用することが多いCMS[Contents Management System]の「WordPress」をインストールから操作方法まで学び「デザイン設計」などで得た知識や技術を活用し、実際にウェブメディアを通じて情報発信するサイト制作をする。CMS運用上の考え方であるコンテンツマーケティングも学び、Webサイト運用最適化を理解する。最終課題は「自身がテーマを決め、収益化に繋がるウェブサイト」という視点で制作したウェブサイトを、全受講生及び連携企業の方に向けプレゼンテーションを実施する。</p>
	メディア戦略Ⅲ	<p>『メディア戦略実践Ⅰ・Ⅱ』で習得した知識や技術及びウェブメディアを活用し、学生自身が「仮想企業」をつくり、IR情報並びに商品情報など、その企業のステークスホルダーに対して適切な情報をインターネットを利活用し制作計画書からサイト制作及びプレゼンテーション、まで一貫して実習を行う。前半では、仮想企業のデザインのカスタマイズやカート機能を実装する技術面としてPHP言語の活用を習得する。PHPがウェブサイトでのどのような役割を果たすかを理解し、適切にサイト内にその技術を取り込み、サイトの利便性を測れるようにする。中盤以降では、仮想サイト運営のための企画書作成を行なう。単にサイトを制作するのではなく、ウェブサイトを通じた戦略を具体的にイメージする。最終課題は、ステークスホルダーにとって有益なウェブサイトであることを受講生及び連携企業の方に向けて各種資料を用いたプレゼンテーションを行う。</p>
	メディア戦略実践Ⅰ	<p>本学が輩出をめざすイントレプレナーとは、新規事業を立ち上げ、それを率いることができるクリエイティブなリーダーである。イントレプレナーは、新しいアイデアを多くの人に伝え、その価値を共有するための広報戦略について、相応の知識を有する必要がある。本科目では、まずメディアについて知識を深め、その効果的な利用方法について考える。また、現在急成長している動画広告について、生成AI等のAI利用技術を活用し、「企画・制作・リリース」のフローを体験し、イントレプレナーにとって有用な知識・経験を身につける。</p>
	メディア戦略実践Ⅱ	<p>イントレプレナーとして、メディアや広報の重要性が高い事業をリードするには、相応の表現能力が必要となる。本科目では「メディア戦略実践Ⅰ」の履修生を対象として、より実践的な内容を扱う。「What to say」「How to say」といった基本からおさえいき、伝わる表現を身につける。さまざまな事例に触れ、自分でも考えてみることで表現の視野を広げる。メディアを用いた課題解決を実践することでメディアを自在に扱えるようになる。</p>

展 開 科 目	メディア戦略実践Ⅲ	<p>近年のドローンの高性能化と、その普及によって、最近ではウェブサイトなどにおいても空撮の映像が多く使われるようになり、映像表現の幅が非常に広がっている。また、物流や農業、建設業など、その用途の幅は広がる一方で様々な課題解決の手段として用いられている。そのような流れの中、ドローンの飛行に関して技術的な側面として安全と不安の声があることも事実である。また、ドローンをビジネスとして活用するための撮影許可などの法規などの知識が浸透していないという現状もある。</p> <p>本授業には、学外にて実習を行い、マルチコプター=ドローンの知識・技能を身につけることで、ドローンのビジネス利用について視野を広げる。</p>
	メディアプログラムⅠ	<p>この講義では、オブジェクト指向言語Javaを習得することを通じて、オブジェクト指向による設計、アルゴリズムの基礎的理解などを固めていく。こうしたプログラミングを通じて、論理的思考、課題の定義、目的と手続きの最適化などを実社会で応用できるようになることが期待される。一連の講義の前半は、Java言語によるプログラムの書き方から始め、データ構造、加減乗除、ループ、If文等の文法やアルゴリズムの基礎を学ぶ。後半では、JavaのAPIを活用したプログラム開発を体験し、アプリケーションを実際に開発する。</p>
	メディアプログラムⅡ	<p>この講義では、Ⅰに引き続き、オブジェクト指向言語Javaを習得することを通じて、オブジェクト指向による設計、アルゴリズムの理解などを深める。Javaの最新バージョンに対応する機能の習得も目指す。また、Ⅱでは、実践的な思考力および開発力も高める。Ⅰの内容を復習しつつ、Ⅱでは応用問題を通じて、特にアルゴリズムの理解を向上させることを目指す。こうしたプログラミング経験を通じて、論理的思考、課題の定義、目的と手続きの最適化などを実社会で応用できるようになることが期待される。後半では、JavaのAPIを活用したプログラム開発を体験し、アプリケーションを実際に開発する。</p>
	国際観光ビジネスⅠ	<p>国際観光ビジネス論学習の前提として、旅行業の定義、旅行業の業種・業態、企画・販売・手配等のプロセスや特徴を学び現在の旅行業概論の全体像を把握する。また、旅行商品の種類や歴史の変遷を俯瞰する。実践課題として、インバウンド旅行の基礎知識を理解し、言葉(Language)・知識(Knowledge)・おもてなし(Hospitality)の観点からインバウンド業務の専門用語やノウハウを身につけていく。また、英語での実際の接客・観光案内を想定した各自のロールプレイやシミュレーションを実践してみる。具体的には、日本の世界遺産の英語による案内・説明を想定した実践練習を行う。また、発展的テーマとして今後のインバウンド市場や旅行業界のトレンドを予測したり、日本のクルーズビジネスの再生や活性化のポイントを考察してみる。</p>

展開科目	国際観光ビジネスⅡ	<p>旅行ビジネスの概要、プロセス、特徴を振り返り理解を深めた上で、新しい旅行業のあり方としてのニューツーリズムについて学ぶ。従来型の旅行商品の発想に留まらず、ニューツーリズムや着地型旅行を生かす手法を学ぶ。さらにDMO（観光地域づくり法人）、MICE（Meeting, Incentive, Convention, Event）やSDG'sの概念・アイデアを取り入れた具体的事例を学ぶことで、これからの旅行業を考える理論や手法を取得する。</p> <p>また日本にMICEを誘致する上で他国の視点も参照し、いかに日本開催にメリットがあるかを考え施行の具体例を考えられるようにする。そして、最終目標として、ユニークベニュー、ニューツーリズム、SDG'sを取り入れたMICEの企画を作成したり、地方創生を目的とした旅行企画を作成できるようにする。またその企画台本を英語で作成できるようにする手法・ポイントを考察・学習する。</p>
	翻訳制作	<p>日英および英日翻訳やその解釈の基礎を学ぶ。両言語における文法の違いを学び、特に英語表現に関わる文化的な知識を学習し、ビジネスで通用する具体的な翻訳手法を身につける。通訳や翻訳が必要となる様々な状況を想定しながら、実践的な訓練を通して「意識」のあり方についての理解を深めていく。</p>
	日米言語比較論	<p>言葉は世界観と言われている。母国語と外国語を比較する意義は、異なる語彙、文法構造、発音、論理的思考法を通して、人間が持ちうる多様な見方、世界観を理解することにある。</p> <p>英語圏の文化（主にアメリカ文化）と日本文化を異文化コミュニケーションの観点から比較し、それぞれの文化圏の背景にある世界観や思想について理解を深める。また対称言語学の視点から、外国語としての英語と日本語の違いを比較し、コーパスを利用しながら言語の特徴を学ぶ。授業の後半は学生が自主的に考え、意見を述べ、プレゼンテーションも行いながら、講義とアクティビティを通して、他の言語と文化を知ることによって日本語と自己文化を再認識するという過程で、普遍的な自己の形成を目指す。また、この講義では日英のコーパス利用方法やプレゼンテーション評価ソフト等を利用したプレゼンテーションスキルの学び、EdTechに関する学びもする。</p>
	国際ビジネスリサーチ	<p>イントレプレナーとして将来活躍するための、素地を身に付ける。経営判断が行われるビジネス現場においては、できる限りのデータ・情報を収集し、それを的確に分析し決断の一助としている。より適切な判断を下す為には、統計知識とその運用能力が必須である。この授業の前半は、エクセルを用いた統計分析方法を学び、後半はグループワークを行う。ある業界・企業を選び、それがどのような経営戦略を取るのが望ましいか、統計を用いて分析する。最後に、ファイナルプレゼンテーションとしてデータ・統計手法・結果発表を英語でおこなう。</p> <p>企業において一人で仕事をする事は皆無であり、チームビルディング力も不可欠な要素となる。リサーチプロジェクトはグループ単位で行い、学生の人間関係構築力をブラッシュアップさせる。</p>

<p>展開科目</p>	<p>異文化理解</p>	<p>コロナ禍中、Society 5.0の社会において、自分とは違う文化的背景をもった人々と共生して困難を乗り越えることは重要である。こうした状況においては、お互いの文化や世界観を理解しあうことが重要である。異文化を理解するには、表層文化・深層文化構造を学ぶ必要がある。本講義では、異文化コミュニケーションの概念を講義するだけでなく、「異文化を理解すること」がどうということなのか、「科学・哲学的」な観点からその意義や役割を考えてみたい。異文化理解と世界観の基礎的な考え方を紹介したあと、比較的身近な「異文化コミュニケーション」について取り扱う。異文化に対する感受性モデルを理解し、実際に海外の若者との交流（国際協同オンライン学習）を通して、世界観の違いを体験する。</p>
<p>総合科目</p>	<p>事業創生実習</p>	<p>これまでの学びの総纏めとしてチームで「事業創生プロジェクト実習」を4年次の必修科目として全学生が履修する。自らの発想と主体的に課題を発見・解決できる能力とチーム調整能力を養い、経営に貢献するための基礎となる能力を身に付けることを狙いとして、学生の志向により話し合いを通して具体的な事業の企画から運営までをチームで経験する。この過程でこれまで学習してきた専門知識を事業運営の各局面で応用する能力を養うとともに、その基盤となる思考力、分析力、表現力、交渉力を身に付ける。実習では、自らの「気づき」を重視し主体的な行動ができるように動機づける。</p> <p>本科目は、4年次に年間を通して実施する。4年前期では、創生する事業のビジョン、これを具体化するための事業戦略の設定を目標とする。4年後期では、戦略を具体化するためのアクションプランの実行と事業の評価を行い、プレゼンテーションを行い纏めとする。</p>